



長野市立博物館  
NAGANO CITY MUSEUM



# 博物館だより

Nagano City Museum

第108号

収蔵資料展「道具が語る人の動き・物の流れ  
～この茶壺はどこから来たの?～」展示資料紹介



写真1 海上安全の文字が記された茶壺

上の写真は、平成12年（2000年）に松代のお茶屋さんから寄贈を受けた茶壺です。販売用の茶葉を保存しておく業務用のもので、信楽焼でできています。壺の表面は柿渋紙で覆われ、そこには大きく「海上安全」の文字が記されています。なぜ長野にある茶壺に「海上安全」と書かれているのでしょうか。

## はじめに

当館にはここ長野で明治時代から昭和30年代頃に使われていた生活道具が多く収蔵されています。これらの道具のなかには、道具の製作者の名前や、製作地、持ち主の名前などが記されたものがあります。この文字情報は、当時の道具の流通や道具とともに動いた人々の存在を教えてくれています。

今回、平成31年1月26日～3月31日の会期で開催する収蔵資料展は、道具に記された文字情報を手掛かりにして、交通網が現在ほど整備されていなかった時代、長野にどのような経路で物がもたらされ、人々が行き交っていたのかを探る内容となっています。

ここでは出品する資料のなかからいくつかを取り上げて紹介したいと思います。まず紹介するのは表紙に載せた茶壺です。

## この茶壺はどこから来たの？

写真の茶壺には「海上安全」の文字のほか、下の写真のように地名や人名も記されています。これらの文字情報からは、この茶壺が山城（京都府）宇治の増井佐兵衛という人物から、長野吉田町の滝澤又右衛門に宛てて送られたこと、「十三年詰」とあることから、その年は明治13（1880）年だということがわかります（写真2）。

さらに茶壺には写真3のような商標が貼られています。この商標は滝澤又右衛門が製作したもので、そこには彼が扱っていたと思われる「昇龍」という茶の銘柄と茶の製造者名（「山城國宇治郡宇治木幡」「茶司平岡平治謹製」）が記されています。現在はありませんが、明治時代には吉田町に「滝の音 滝屋茶店」というお店があったので、商標にある「滝

茶壺の墨書



写真2



写真3 茶壺に貼られている商標



写真4 「御茶銘録并價表」明治16年9月（長野市公文書館蔵）  
この中に「昇龍」の銘柄がみられる



乃音」は滝澤又右衛門が経営していた店舗の呼称と考えられます（写真3）。

以上を総合すると、この茶壺はもともと京都の宇治で茶が詰められ、廻船などの船により新潟のいずれかの港まで運ばれ、そこから陸送で長野に届けられたものであることがわかります。

長野に鉄道が敷設されるのは明治21（1888）年ですので、明治13年時点での物流の担い手は、江戸時代から続く西回り航路を使った船運でした。この茶壺はその頃の物流の経路をよく表している資料といえます。

## 長野に広まった 島根県産の水がめと千歯扱き

次に紹介する資料は水がめと千歯扱きです。水がめは日常の生活道具、千歯扱きは農作業道具といったように全く関係のない二つですが、いずれも明治時代に島根県で作られたという共通点を持っています。

### ・石見焼の水がめ

水道が普及するまで、各家庭では井戸や川から汲んできた水を生活用水としてきました。そのため汲んだ水を貯蔵する水がめは、生活をするうえで欠かせない道具でした。

当館常設展示室2階にある昔の暮らしを再現した古民家の中にも、水がめが置かれています。この水がめは、開館以来ずっと古民家に展示されていましたが、今までその産地を気にしたことはありませんでした（写真5）。ところが数年前に島根県の高校の先生から突然電話がありました。その内容は当館のHPで公開している常設展古民家内に置かれている水がめが、石見焼と考えられるので調査させてほしいというものでした。

調査当日、水がめをひっくり返してみたところ、底には石見焼の製造元の屋号が墨書さ



写真5 常設展古民家内

れていました。しかもその製造元は大正初年に地元に鉄道が敷かれる際に駅の用地となったため、廃業した所でした。そのため、この水がめは鉄道敷設以前、茶壺と同じように船によって日本海経由で長野に来たこととなります（写真6）（写真7）。

その後、調べてみると水がめをはじめとする石見焼の日用雑器は、当館だけでなく、白馬村や旧堀金村（安曇野市）、さらには軽井沢町の博物館にも展示・収蔵されていることがわかりました。



写真6  
水がめの底に 壺号  
五斗入 五寸入■■  
三寸■■ ■■■■



写真7 『石見国商工便覧』中谷與助  
明治27年（島根大学附属図書館蔵）

これまでの研究では、耐寒性に優れた石見焼の容器は、北前船が隆盛を迎える幕末から明治初期にかけて、産地の硯地方（島根県）の港から、日本海沿岸地域はもとより北海道や樺太にも流通していたことがわかっています。長野県内での広がりや、その流通が沿岸部だけでなく、内陸にも食い込んでいたことを示すものであり、日常雑器としての石見焼の品質と競争力の高さを示すものといえるでしょう。今後調査地を広げれば、さらに県内の多くの地域で石見焼の日常雑器が見つかるものと思われます。

### ・木次産の千歯扱き

千歯扱きは、収穫した稲穂から稲糊を扱き取る道具です。今から300年以上前の元禄年間に大阪で発明されたとされます。それ以前の二本の棒を使った稲扱き作業よりも飛躍的に仕事の効率が上がりましたが、全国に広がるのは近代に入ってからでした。

千歯扱きの製造には大量の鉄と専門の技術が必要とされたため、鳥取県の倉吉、福井県の早瀬、新潟県の佐渡など、条件に適したところに産地が形成され、製品が全国に流通し

ました。当館にも倉吉産の千歯扱きが収蔵されています（写真8）。しかし、収蔵している千歯扱きを詳しく調査すると「島根県内榊原」「製造所 榊原運兵衛」の焼印が押されたものが倉吉産のものより多く見つかりました（写真9）。

島根県産の千歯扱きは、雲南市木次町で明治から大正にかけて盛んに作られました。木次町は出雲で作られた鉄の輸送中継地だったこともあり、もともと多くの鍛冶屋がいた地域です。また、千歯扱きの産地として有名な鳥取県倉吉が近くに位置していました。

その中で、もともと釘を製造していた木次町の榊原家が、千歯扱きを使うからみ釘の販売を通じて倉吉の千歯鍛冶と交流を持ち、そこから技術を学んで、幕末頃には千歯扱きを作るようになったといわれています。

しかし、大正2年当時の島根県産千歯扱きの移出量が8,800挺なのに対し、倉吉では95,000挺が生産されるなど、流通する量には絶対的な差がありました。そのため、現在では各地に残っている島根県産千歯扱きは少なく、倉吉や早瀬ほど産地として有名ではあ



写真8  
倉吉産千歯扱き  
「精錬鋼製 伯耆國倉吉町 松田宇平作」



写真9  
島根県産千歯扱き  
「島根県 内榊原」  
「本場製造所 榊原運兵衛」

表1 島根県の稲扱(千歯)移出状況

	数量	金額	移出先
明治37	14,604	14,505	東京、大阪、北国、長野、九州
38	9,339	5,746	愛知、岐阜、大阪、広島、山口、九州
39	4,447	3,270	岐阜、大阪、神戸、広島、山口、愛媛
40	4,884	11,000	岐阜、大阪、神戸、広島、山口、愛媛
41	2,457	3,706	愛知、岐阜、鳥取、山口、九州
42	1,580	1,960	愛知、岐阜、山口、九州
43	2,440	1,860	山口
44	2,880	2,820	東海、東山、大阪、山陽、九州
大正元	8,880	8,430	山口、四国、九州
2	8,800	8,128	四国、九州
3	6,400	7,000	四国、九州
4	16,450	23,980	長野、鳥取、四国、九州
5	2,420	4,134	東京、大阪、鳥取、山陽、四国、九州
6	1,100	2,200	各地方
7	520	2,100	東京、大阪、山陽、九州
8	12,500	26,500	東京、大阪、岡山、広島、九州
9	750	1,560	九州
13	5,000	19,500	鳥取
14	600	9,000	山口、朝鮮

『斐伊川の砂鉄採取と木次の鍛冶屋』(角田徳幸 2018)より転載

りません。

木次町で作られた千歯扱きは、倉吉の千歯扱きも扱っていた近隣の西浜村の行商人によって周辺地域や大阪方面に販売されたほか、境港から船運によって各地に販売されました。明治末から大正年間の島根県産の千歯扱きの移出状況をまとめた上の表をみると、販売先に九州や四国といった西日本が多く見られるなかで、長野の名も見られます(表1)。表中に当時稲作が盛んだった地域が見られないのは、島根県が産地としては後発だったため、それらの地域にはすでに倉吉や早瀬産の千歯扱きが出回っていたものと考えられます。そのため島根県産の千歯扱きは、先行する産地が未開拓の地域に重点的に販売されたと考えられます。長野もその一つだったのかも知れません。

## 前挽き鋸の銘からわかる産地の変化と技術改良

大工道具の鋸と比べ大型で、クジラのようなフォルムが特徴的な前挽き鋸は、切り倒した丸太を木材に加工するときに用いられた道具です(写真10)。記録では室町時代、豊臣秀吉による京都方広寺造営の頃に現れたとされます。以来製材道具として400年以上の間、杉や木挽きと呼ばれる伐木・製材の職人に愛用されてきました。

江戸時代半ば頃まで前挽き鋸の産地は京都が独占した状態でしたが、江戸時代後半から近代に入ると京都に代わって甲賀(滋賀県)、三木(兵庫県)、土佐(高知県)が主な産地となり、その他各地でも作られるようになりました。

当館には、市内の下駄屋が使用した前挽き鋸



写真10 市内の下駄屋が使用した前挽き鋸

表2 館蔵前挽き鋸

所在	銘文等	名称	産地	備考
本館	「上」改	かがり	—	—
本館	「二右門」磨金の刻印	挽き削り鋸	京都	下駄屋道具
本館	「下撰」正請合」製銘あるも不明	木挽き鋸	—	他に刃広・矢・手斧・墨巻寄贈
本館	磨金の刻印	大鋸	京都	—
本館	「上」ほか不明刻印	大鋸	—	井上四十五郎氏(M13.5.21生)使用
本館	「下撰」正請合」製銘あるも不明	大鋸	—	井上四十五郎氏(M13.5.21生)使用
本館	「下撰」正請合」製銘あるも不明	鋸	—	—
本館	「商標(カ)」甲賀」	鋸	甲賀	他に鉋寄贈
本館	「翁作 別打」	前挽き鋸	—	下駄屋道具・宮之本源太郎氏(M31.1.6生)使用
本館	「商標登録 天彦」	前挽き鋸	甲賀	下駄屋道具・宮之本源太郎氏(M31.1.6生)使用
本館	「上」	大鋸	—	—
本館	—	芯切鋸	—	—
本館	「越後高田 中屋への丞造」(「雲」)	芯切鋸	越後	—
中泉	「改」	前挽き鋸	甲賀	—
信州新町	「岩松？」	大鋸	—	横挽き鋸
信州新町	—	大鋸	—	縦挽き鋸
信州新町	「別」上」正」	大鋸	—	縦挽き鋸
信州新町	「本」	大鋸	—	縦挽き鋸
豊野	「三上七郎右衛門」	大鋸	—	—
豊野	「三上七郎右衛門」ミカミ」商標登録	大鋸	—	—
豊野	「見神」	—	—	—
豊野	「別」上」正」	大鋸	—	—
鬼無里	「本？」	—	—	—
鬼無里	「商標登録(カ)」江州甲賀」	—	甲賀	—
鬼無里	「うめ？」刻印・製銘あるも不明	—	—	—
鬼無里	「■丞？」(製銘)	太挽鋸	—	—
鬼無里	刻印あるも不明	大山鋸	—	—
鬼無里	製銘あるも不明	—	—	—



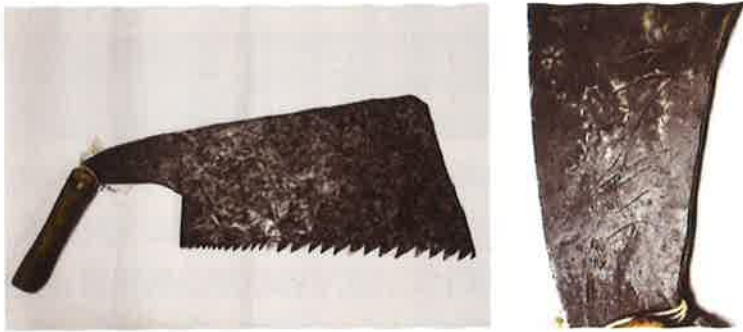


写真 11  
「二ろ右門」の銘がある前挽き鋸

使用したものが20点ほど収蔵されていますが、その多くには柄に近い場所に製造者の名前や屋号が鑿や刻印で刻まれています。これは品質保証の意味も込めて、作った鋸に銘を刻む場合が多かったためだと思われます。そのおかげで現在残された鋸からその産地を知ることができます。それをまとめたものが前頁の表になります（表2）。

館蔵前挽き鋸のうち最も多いのが、甲賀産の鋸です。甲賀では江戸時代中頃から、当時前挽き鋸のブランドとして有名だった雁金屋の屋号を持つ京都の鋸製造仲間の株（権利）を買い、京流鋸の名で製造を始めていました。前頁に載せた写真10の鋸も甲賀産です。一方、写真11の鋸には柄の部分に鑿で刻まれた「二ろ右門」の文字と雁金の刻印が打たれていました。そのためこの鋸は京都雁金屋の製造のものと考えられます（写真11）。

写真10と11の形を比べるとかなり異なっているのがわかると思いますが、これは鋸製造に使用される原料の違いからくるものです。写真11の製法は玉鋼と呼ばれる鉄の塊を、槌で厚さが均一になるまで叩いて打ち延ばし、鋸歯部分を鑿で打ち抜いたら、一本一本の歯ごとに焼き入れと焼き戻しを施していくもので、根気と体力を必要としました。この製法で作られた前挽き鋸は写真10のものより小振りで、形は長方形に近くなります。また表面には平たく打ち延ばした槌跡が模様のように残っているのが特徴です。

一方、明治30年代後半になると外国から輸入された、安価で加工のしやすい鉄（洋鉄）が用いられるようになります。東郷鋼の商品名で売られた洋鉄は、すでに板状になっているため打ち延ばす手間が省け、それでいて玉鋼で作った鋸と遜色のない性能だったようです。また丸太を製材する際には、鋸自体の重さも利用して木を挽いていました。そのため打ち延ばす必要のない洋鉄になると、鋸を大きくして重さを増やすのが容易になるため、鋸の形がそれまでの長方形からクジラのような形に変わっていきました。

当館収蔵の資料は、このような前挽き鋸の生産地や製造技術の変化を教えてください。

### 道具に記された輪島の漆掻き集団

写真12の桶は、昭和20～30年代に、能登半島から鬼無里や戸隠、七二会といった市内西部の中山間地に、漆を掻き取りに来ていた人たちが使用した道具です。これらの道具は、昭和58年に市内南泉町にあった村田旅館という商人宿が取り壊されたときに物置から見つかりました。この旅館は、かつて能登半島から来た漆掻き集団の親方が、春先から秋頃までの漆掻きのシーズン中、定宿として長期滞在していたところでした。

能登半島には漆器の産地として有名な輪島があります。現在、漆器の原料となる漆は輸入品が大半を占めていますが、昭和30年代



写真 12 漆入れ桶



写真 13 漆掻き職人の道具(石川県輪島漆芸美術館蔵)



写真 14 漆入れ桶底面

までは国内産のものも使われていました。輪島周辺には漆を掻き取る職人がいて、漆の産地へ赴き、春から秋にかけて漆を掻きました。その主要産地が岩手や長野といった山間地帯だったのです。

長野市周辺では越前今立郡にいた漆掻きの親方と、輪島周辺から集められた十人前後の掻き子がシーズンになると訪れ、親方は村田旅館を拠点とし、掻き子は市内西部の中山間地に散らばり、それぞれ地元の農家に間借りをして自炊をしながら漆掻き作業を行いました。漆掻きは漆の木の表面に螺旋状に傷をつけ、そこから染み出る樹液を掻き取って、腰につけた桶に溜めていきます。その作業道具が写真 13 になります。これらの道具のうち、金物類は親方から支給され、漆を入れる桶は自前で作りました。

樹液は午前中が出が良いため、掻き子は早

朝 4 時頃から漆の木を回り樹液を掻き取っていきます。掻き子 1 人が受け持つ漆の木はおよそ 400 本で、そのうちの 100 本を 1 日で回り、4 日間のローテーションですべての木を回りました。シーズン中に採取できる量は、掻き子の技術によって差はありましたが、多い人で 2 斗程でした。

村田旅館に残された漆桶は、掻き子たちの漆を集めてまとめる時に使ったものと思われます。小さな桶の裏には写真 14 のように掻き子の住所と名前が記され、どこで漆を掻いたのかがわかるように、作業地まで記されています。おそらくある程度量がたまった漆を、親方の所にもっていくときの容器だったのでしょう。他の掻き子と自分を区別するためにこのような墨書が記されたものと思われます。

漆掻きのシーズンが終わると、親方は来年もまた旅館を利用するからということで、漆



写真15 「耳より」と入った漆塗りの弁当箱

桶などの道具を置いていくのが常でした。しかし昭和30年代末頃から安価な輸入産の漆におされ漆掻きの仕事が廃れると、能登からの集団は来なくなり、預かった道具だけが物置に残されたのでした。

現在、村田旅館のあった場所の隣には食堂があります。この食堂は旅館があった頃に、旅館の女将さんが始めた食堂です。ここには食堂を始めるときに漆掻きの親方から贈られたという漆塗りの仕出し用弁当箱30膳が残されており、今でも大切に使われています(写真15)。

### おわりに～ 道具からわかることは？

以上、今回の展示会で出品する資料の中からいくつかを紹介してきました。

これまで、博物館や資料館に収められている道具は、それを使っていた当時の人たちの暮らしの様子を伝える資料として見られ、ど

のように使われたのかという点に主な注意が払われてきました。

しかし、道具が伝える情報はそればかりではありません、今回のように道具に記された文字情報を手掛かりに、製造と流通という面に目を向けると、これまで気づけなかった地域とのつながりや、道具とともにやって来た人たちとの交流の一端が浮かび上がってきます。

今回は道具が作られた産地に焦点を当てましたが、どのような経路を辿ってこの地に来たのかについてはまだわからないことがたくさんあります。今回の展示を機に調査を進め、その成果を再びみなさんに紹介できれば幸いです。(細井雄次郎)

#### (参考文献)

朝岡康二 1993 「西日本の千刃扱き」日本常民文化研究所調査報告8

岡田あい子 2001 「島根県木次町における千歯扱き生産の発展に関する歴史地理学的考察」島根大学卒業論文

甲南町教育委員会 2003 『近江甲賀の前挽鋸』

阿部志朗 2013 「日本海沿岸地域にある近代の石見焼」民具研究148号

安嶋晃晴 2014 「輪島漆器産地における昭和30年代の漆掻き職人衰退要因とその背景」地域公共政策研究23号

角田徳幸 2018 『斐伊川の砂鉄採取と木次の鍛冶屋』八日市地域づくりの会刊

## 博物館だより 第108号

発行日2018年12月28日

### 長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414

TEL:026(284)9011

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

### 戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400

TEL:026(252)2228

### 鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659

TEL:026(256)3270

### 信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3

TEL:026(262)3500

### ミュゼ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1

TEL:026(262)2500